

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	はじめに
Author(s)	水羽, 信男
Citation	拓蹊, 3 : 84 - 84
Issue Date	2020-05-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049180">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049180</a>
Right	
Relation	



## 小特集 布川弘さんを偲んで

水羽信男

布川弘さんは1958年2月に山形県で生まれ、2019年9月27日に亡くなった時、満61歳。金沢大学文学部、神戸大学大学院での研鑽を通じて研究者となった布川さんが、広島大学総合科学部に赴任したのは、僕と同じ1996年10月だった。当時、すでに布川論文のファンだった僕は、ワクワクしながら初対面の挨拶をした。広島の中国近代史研究会との関係は、2001年に曾田三郎編『近代中国と日本：提携と敵対の半世紀』の合評会での報告をお願いしてからだったと記憶している。それ以後も、僕たちの研究会に企画段階から積極的に関わってくれた。本号の金子さんの本の合評会にも、病床にありながら参加したがった。ともすれば一国史の枠のなかに閉じこもりかねない「国史」研究者とは異なり、布川さんはアジア史、世界史の流れの中で日本の問題をとりあげようとしており、その発言は僕らにとっても刺激的だった。また布川さんが、広島大学文書館のスタッフとしてオーラルヒストリーなど新たな研究手法を開拓している姿も、示唆的だった。本号で小特集を組む所以である。

2014年5月に総科の同僚教員が『産経新聞』の「歴史戦」における攻撃対象となった。広島大学の労働組合活動にも積極的に関わっていた布川さんは、当時の大学当局だけでなく、教職員組合のありようにも強い危機感をいだいた。ただ、布川さんの言いたいことは分かったが、表現の仕方が今までとどこか違うと僕には感じられた。その主張にも、全面的には賛成できなかった。この年の秋、布川さんから、副鼻腔癌を発症したと聞いた。場所は横川駅ガード下の「赤ひげ」という小さな料理店だった。その後、手術も成功し一度は職場復帰できたが、2017年夏に再発、2年間の闘病生活だった。人が病に罹患する要因はさまざまだろうし、原因がわかったところで詮ないものだ。とはいえ、中子さんに買ってもらったという簡易ベッドを研究室に持ち込み、研究・教育活動に精力的に取り組む一方、夜を徹して2005年4月に設置された広島大学総合科学研究科の制度設計を行い、また2011年に全学共通の平和教育を具体化した苦労は、並大抵のものではなかったろう。学外の広島の民主団体の運動も積極的に支援した。ちなみに本号で扱った劇団月曜会の学習会講師も担当している。布川さんを突き動かしていた情熱は何で、どこから来ていたのだろうか。

本小特集に掲載した編年体の業績目録は、勝部真人さんと石田雅春さんの助力を得て、丸田孝志さんが李芸さんと完成させた。エッセーは布川中子さんから提供を受けた。回想記の依頼は止めた。というのも布川さんの交流範囲は広く、僕がカバーできるわけがないと気づいたからだ。自宅にお見舞いに行った時、広島大学に赴任する前の非常勤講師時代の卒論ゼミ生(?)が来てくれると嬉しそうに語っていたことを思い出す。

この小特集を僕らにとって意義ある生きた記録にしてゆきたいと考えている。